

〔巻頭言〕

現在を知り、過去に学び、未来を考える

——『死生学・応用倫理研究』継続刊行に寄せて

池澤 優

ここに『死生学・応用倫理研究』第十八号をお届けする。今号から『死生学研究』は『死生学・応用倫理研究』と改名されることになった。先ず、そのことについて、若干の説明をいたしたい。

改めて言うまでもなく、『死生学研究』は二〇〇二年に始まった二十一世紀COEプロジェクト「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」の機関誌として刊行された。創刊は二〇〇三年三月である。その後、二〇〇七年にグローバルCOE「死生学の展開と組織化」に活動が引き継がれた後も、継続して発行され、二〇一二年三月にCOEプロジェクトが終了するまで、十七号（および特集号四号）が公刊された。

二〇一二年のプロジェクトの終了を前に、東京大学文学部・人文社会系研究科では「死生学・応用倫理センター」を創設し、「死生学」の活動を継承することにした。「死生学・応用倫理」という名前になつたのは、COEプロジェクトと並行する時期に、文学部は全学に開かれた教育プログラムとして「応用倫理教育プログラム」を開講してきており、その重点の一つが生命倫理や臨床の領域であるため、既に設けられていた寄付講座

「上廣死生学講座」をも統合し、死生学と応用倫理の分野に関し、総合的な研究と教育を推進していくことになつたものである。それに伴い、死生学・応用倫理センターは『死生学研究』の刊行をも継承し、ただ、センターの名称にならつて、誌名を『死生学・応用倫理研究』に変更することになった。残念ながら、COEの時ほど、資金が潤沢ではないため、年二回の刊行を一回に減らざるを得なかつた。

死生学と応用倫理を連結させたのは、単に両者が医療・臨床の分野で重複するからだけではない。『死生学』の目的、あるいは広い意味での任務は、すでに世を去つた、すなわち死者である先行する世代の経験や遺産を受け継ぎ、未来の世代にとつてより良い人間社会をどう作りあげていくかをさぐるところにあるのであつて、それは現在のわれわれがいかなる存在であるべきかを考える「応用倫理」と、完全に問題関心を共有している。東日本大震災を例に挙げるまでもなく、死者のいかなる記憶をどのように構築し、伝えていくかという問題は、われわれが過去をどう捉えるかを反映するだけではない。それは、われわれが現在の社会の何が問題であると感じるのか、将来、どのような社会を実現するべきと考えるのかを反映するのである。

以上のような次第であるので、誌名が変更になつても、我々が目指していく学知のあり方に変更があるわけではない。顧みれば、COEプロジェクトの初代リーダー、島齒進は『グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の課題と目標』と題する文章の中で次のように述べていた。

東京大学における死生学の恒久的な組織化に向けて、果たすべき課題は多い。具体的には、（1）死生の文化の比較研究、（2）死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察、（3）人文科学の現代的実践現場への関与、という三つの課題に集約される。

島薦が言う「三つの課題」が、我々が目指す方向を的確に表している。死生学にせよ、応用倫理にせよ、現代において噴出する諸問題を前にして、一九六〇年代以降、生まれてきた新しい領域である。急速に変貌する新しい状況に対応するには、学問は複合的かつ柔軟である必要があるが、それが付け焼き刃的な対応に終わるなら、本当の意味で現代の諸問題を乗り越えることはできない。何よりも、人類は今までの歴史上の変化を常にその時点において有していた知を活用することで乗り越えてきたのであり、それは二十世紀後半以降の変化においても例外ではない。その点の認識が不足すれば、我々の知が伝統によって制約されていることが看過され、自分たちの対応が唯一絶対であると思い込むような独善につながるであろう。それ故に、現代に対応する真の学知は、人間存在の本質に対する深い洞察と、過去の歴史に関する豊かな知識に裏付けられていなければならぬのである。

故に、我々は先ず、現代的な新しい状況に積極的に関わっていかねばならないが、そこで得られた知見は、人類のあり方と歴史に照らして検討されねばならない。第一の分野が現状において何が起きつつあり、いかなる知が求められているのかを知るための“臨床”的分野であるとすれば、第二の分野は、死生や倫理に関する人類が積み重ねてきた知を探求する、歴史的、文化的な研究の領域になるであろう。第一の分野は第二の分野に刺激を与え、第二の分野は第一の分野に現状を理解し、問題点を探るための視点を与える。しかし、それだけでは充分ではない。第一の分野（現在）と第二の分野（過去）を踏まえた上で、では将来においてどうあるべきであるのか（未来）に昇華させる必要がある。つまり、現在と過去を踏まえた上で、人類の未来を哲学的に究明すること、それこそが、死生学・応用倫理センターが構築しようとする学知になるだろう。

以上のような理念を基盤として、死生学・応用倫理センターは、その活動として四つの柱を立てたい。
第一は、死生学と応用倫理を部局横断的に東京大学の全学部生・大学院生を対象に教育する「死生学・応

用倫理教育プログラム」の遂行である。先述のように、「応用倫理教育プログラム」は二〇〇一年の開設以来、学部・大学の垣根を越える授業を提供してきたが、更に「上廣死生学講座」（現在の名称は「上廣死生学・応用倫理講座」）の開設科目と統合し、かつ協力部局を大幅に拡大した上で、東京大学の部局横断型プログラムとして開講していく。この教育プログラムは、二〇一二年四月から始まており、死生学と応用倫理の包括的な教育の試みとして、本邦初のものであるはずである。今後とも開講科目を充実させ、同プログラムの運営をセンターの中心事業にしていく。

第二は、医療、看護、介護等の現場に携わる人々に東西文明の知を提供する。「臨床死生学リカレント教育」の実行である。このプログラムは、二〇〇七年にCOEプロジェクトの中に「上廣死生学講座」が開設されると同時に始まつた。始まつてまだ五年ではあるが、医療現場で得にくい人文学の臨床的知を得ることができる場として、毎回極めて人気が高い。また、地方でのセミナーなども継続的に開催されているため、このプログラムを通して、職種や地域を越えての交流が生まれており、東京大学の社会に対する貢献として、極めて重要なものであると認識している。死生学・応用倫理センターは、この事業を継承し、更に充実させていく。

第三は、公開の国際シンポジウムの開催や臨床現場への情報の提供を行う「国際的・社会的な発信」である。COEの活動の期間を通じ、おびただしい数の研究集会が挙行された。十年間に開かれた国際シンポジウムや講演会の総数は、百二十一に及び（内輪の研究集会や研究会は含まない）、疑いもなくCOEプロジェクトの最大の成果の一つであろう。特筆すべきことは、それらを通じて、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、韓国、中国、台湾、エジプトなどの研究者との間に恒常的な関係ができることがある。資金の制約のため、同じ規模で研究集会を開催し続けることは不可能であるにせよ、死生学・応用倫理センターは、この分野における活動を継続していく。二〇一二年度のシンポジウムとしては、フランス国立極東学院、トゥールーズ

大学の協力を得て、「災害が遺したもの——語りつぐ記憶と備える文化」を開催し、二〇一三年度には日本生命倫理学会年次大会（二〇一三年十一月三〇日、十二月一日）を、センターが開催校となつて開くことになつてゐる。これらの研究集会の記録は、やがて本誌に掲載されることになるであろう。「死生学・応用倫理研究」は、センターの活動を広く社会に発信する場となるのである。

第四の活動は、上述のような多様な活動を通じて若手研究者を育成することである。死生学・応用倫理という新たに生まれつたる領域は、それを継承する若手研究者の育成なくしては、継続的発展を期待することができない。COEプロジェクトの時と同様、次世代の研究者の育成は、最も重要な課題といつても過言ではない。その上でも本誌の意味は重いと考えている。若手研究者が、最新の研究成果を本誌に掲載することによつて、切磋琢磨する場を得ること、それも『死生学・応用倫理研究』の重要な任務である。

読者諸氏におかれでは、本誌を通して、死生学・応用倫理センターの活動に関心を持つていただきたい。『死生学・応用倫理研究』を通して、死生学、応用倫理という新しい学知の創出に、読者諸氏と共に貢献すること、それこそが我々の希望である。

（いけざわ・まさる 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター センター長）